



沢田内科医院 ニュースレター

第 138 号

入院病棟閉鎖のお知らせ

通院中のみなさまには年明けの1月4日から受診時にお知らせをはじめていましたが、令和6年1月16日より当院の入院病棟は閉鎖となりました。直接的な理由は看護師の人員配置の問題で夜勤が組めなくなってしまったためです。前院長美彦時代からずっと継続していた入院病床を持つ診療所、有床診療所としての機能は果たせなくなりました。これは非常に大きなことです。

ご存じの通り、診療所と病院は病床数で区別されます。19床以下の病床を持つ、いわゆる医院、クリニック、開業医と言われるところが診療所、それ以上の病床を持っているのが病院といいます。沢田内科医院は19床の病床を持つ有床診療所として開院し、令和2年4月、直也が院長として継承するタイミングで11床に減らして保健所に届け出をして開院しました。

継承直後は以前と同じようにベッドを利用していました。めまいや胃潰瘍、高齢者の肺炎や心不全、原因不明の発熱や癌の終末期など多彩な症状の患者さんを入院でみていました。特に重症患者さんや終末期の方が入院しているときは、夜間に当直の看護師さんからの電話連絡も頻回にありまして、実際に夜に何度も病棟を訪れて診療したりと、かなり体力的にも大変でした。しかし、自分に信頼を寄せて入院してきた患者さんたちを治療するのはむしろありがたいという気持ちでみてきました。



そうこうしているうちにコロナ禍になりました。最初のコロナ患者さんもふだんと同じように入院で

肺炎治療をしているときに遭遇しました。中国の武漢からはじまり、徐々に日本全国に拡大しつつあるとき、最初期のコロナはそれこそ謎の伝染病、誰でも感染しうる、しかも重症化して死ぬかもしれないという恐怖がありました。ワクチンもない、治療薬もない、情報もまだあまりないという状況で、自分自身も怖いと思いましたし、職員も怖かっただろうなというのは容易に想像できました。

何より困ったのが院内で入院患者さんや職員間で感染が蔓延してクラス



開業以来はじめて誰もいなくなったナースステーション

ターになってしまった場合の対応です。職員が次々感染してしまうと休まなくてはなりませんので、マンパワーの問題で患者さんを診察することができなくなってしまうます。入院患者さんがコロナにかかるるとさらに大変です。そもそも癌や心不全など大きな病気の治療のために入院しているのに、さらにコロナに感染するとそれが命取りになってしまう恐れがありました。コロナ陽性となった場合に転院させて治療できればいいのですが、毎日何百人、何千人も陽性になっているような状況ではとても大きな病院では引き受けてもらえないというのが現実でした。実際に施設や、精神科の病院などでクラスターが起きても、ほとんどは転院することなくその場で治療が行われることが多いという状況でした。

そのためコロナ禍が本格的になってから当院では自主的に入院を制限していました。めまいなど数日で症状がよくなるのがわかっていて、他の疾患でも比較的軽症でいざとなれば外来でもみていけるような方に限って入院していただき治療するようにしていました。病気として中等症～重症の方、長期入院が予想される方は無理せずに最初から後方病院に

入院をお願いすることにしました。ここ数年の入院患者さんは平均2～3名/日でした。食堂の職員にとっては食事を提供するには物足りない入院患者数だったと思います。

入院病棟の強みは実際の診療だけではありません。24時間365日、何かあれば電話で対応できるというのが最大の利点でした。日中に診療していても「何かあればとりあえず医院に電話してください」これが言えるのは私たち診療する側にとっても、治療を受ける患者さん側にとっても大きな命綱になっていたと思います。電話越しに看護師さんに不安を聞いてもらうだけで症状がよくなることもありますし、電話がきっかけで急変をいち早く察知し輪番病院に救急車で搬送となり一命をとりとめた方もいます。

長らく通院されている患者さんには1人1枚、これまでの病気をまとめた病歴要約というものが存在します。急患で他の病院に行くときは、これを転院先にFAXや郵送で送っています。これがとても感謝されています。自分でも大学病院や弘前市立病院で救急担当だったときに経験がありますが、救急で受診された患者さんで一番大変だったのが、現在あるいは過去にどんな病気があったのか、現在内服している内服薬がどんな病気の治療目的で処方されているのかの特定に時間と手間がかかることでした。本人はウンウン苦しがついていて、連れてきた方は何もわからない、そういう中で情報を集めるのはかなり大変です。沢田内科医院の病歴要約にはそれが全部書いてあります。時間外に問い合わせがあってもすぐにそれがFAXで届き、治療に活かされる。それが入院病棟を持つ強みでもありました。

今回入院病棟閉鎖のお知らせを出す中で、やはり今後への不安、そして率直に残念だったという声に遭遇します。最終的にはここで最期を迎えたかったとか、先生に看取ってほしかった(まだ全然そんな気配もないくらい元気な方でしたけど・・・)という声を聞くと本当に重い決断をしてしまったのだと改めて思います。看護師は減ってしまうのですが、沢田内科に通院している患者さんは今も着実に増え続けています。期待されている役割および責任を果たしていかなければなりません。入院病床がなくなっても、その分外来の質がよくなった。そう言われるくらい診療の質を上げて頑張っていく所存です。



静寂に包まれた病棟の廊下

時間外の急病時の対応について

それでは時間外に具合が悪くなってしまった場合、どうすればいいのでしょうか？スマホを持っていて、ネット環境がある方は沢田内科医院のホームページの最上段「急病のとき、どうしたら

いいのか？」のバナーをクリックしていただければ、状況に応じた対応が出てきます。以下、ホームページと同じ内容ですが、再掲しておきたいと思います。

■ 時間外に具合が悪くなったかどうか？

- ①月曜、木曜は午後診がありますので18時までは電話対応が可能です。火曜、水曜、金曜、土曜の午前診療だけの日でも、令和6年1月現在、夕方18時までは残り番をしている看護師が対応できる場合がありますので、まずは当院に電話を下さい。
- ②どうすればいいのか迷ったら夜間、休日でも**0172-32-3999**に電話すると弘前消防本部につながります。急患診療所や輪番病院など、そのとき受診できる医療機関を紹介してくれます。
- ③小児の場合は**0177-22-1152**あるいは**#8000**に電話して指示をあおいで下さい。
- ④動けないくらい具合が悪い、意識がない、呼吸困難、麻痺、呂律が回らない等、明らかに急を要する場合は**119番**で救急車を呼んで下さい。

■ 急患診療所とは？

弘前市野田の弘前総合保健センター内にあります。平日夜間は19時から22時30分まで、休日は10時から16時まで診療しています。看護師と当番の医師(私を含め開業医が当番で出ています)がおり、**0172-34-1131**で受診するかどうかも含めて電話で相談することができます。日中ほど詳し

■ 内科輪番病院とは？

夜間(17時～翌朝8時半まで)、休日は弘前総合医療センター、健生病院、弘前大学医学部附属

■ 眼科、耳鼻咽喉科、歯科の救急はどうするか？

同じく弘前消防本部**0172-32-3999**に電話して問い合わせせてみて下さい。

■ 弘前市の急患についての情報はどこから手に入ればよいのか？

弘前市医師会のホームページ(<https://hirosaki-med.jp/>)と弘前地区消防事務組合のホームページ(<https://www.hirosakifd.jp/>)が便利です。医師会のホームページでは「急患診療所のご案内」から入ると当番の病院、急患診療所の案内が出ます。消防のホームページで

は「救急」を押すと詳細がでえます。「医療機関紹介電話」の項目をご参照下さい。

救急医療機関には、症状・緊急度に応じて役割分担があります。

初期救急医療機関

- 弘前市急患診療所
- 休日在宅医

外来診療で対応可能な軽症患者者に対応

転送
(重症のとき)

二次救急医療機関

- 輪番制参加病院
- 救急告示病院

入院や手術等が必要な中等症患者者に対応

転送
(さらに重症のとき)

三次救急医療機関

- 弘前大学医学部附属病院
- 高度救命救急センター

生命にかかわる重篤患者者に対応

発熱や切り傷などの場合は、初期救急医療機関へ

救急医療機関は、急病な方のための応急的な処置を行う医療機関であり、時間外診療とは異なるものです。「初期」、「二次」、「三次」に区分され、患者の症状や緊急度に応じて役割を分担しています。発熱や腹痛、切り傷などの比較的軽い症状のときは、「急患診療所」、「休日在宅医」を受診しましょう。

■急患診療所 34-1131

野田二丁目7-1 弘前総合保健センター内

夜間【内科、小児科】

午後7時～午後10時30分(年中無休)

休日【内科、小児科、外科】

午前10時～午後4時(日曜、祝日、8月13日、12月31日～1月3日)

■休日在宅医：【眼科、耳鼻咽喉科、歯科、内科】

・診療している医療機関については、下記の「休日・夜間の医療情報」をご確認ください。

●こども救急電話相談

・毎日 午後7時～翌朝8時まで

・局番なしの**#8000**(携帯電話・プッシュ回線)

※あくまでも助言を行うものであり、診療指示等の医療行為は行いません。(ダイヤル回線・公衆電話からは017-722-1152)

こんな症状の時は、迷わず**119番**

- 意識がない
- 呼吸困難
- ろれつが回らない
- 激しい頭痛、胸痛、腹痛
- 多量出血など

休日・夜間の医療情報

このほか、休日在宅当番医師(耳鼻咽喉科・眼科・歯科・内科)や、救急医療情報システムの加入医療機関など、休日・夜間の当番医をお知らせしています。また、お子さんがすぐ病院に行くべきかどうか判断の目安を提供するWebサイト「こどもの救急」もご覧ください。

■弘前消防本部：32-3999(医療紹介電話)

■あomorい医療情報ネットワーク：<https://www.qq.pref.aomori.jp/>

■こどもの救急：<http://kodomo-qq.jp/>

■弘前市医師会：http://www.hirosaki.aomori.med.or.jp/ht_99/index.htm

■弘前市歯科医師会：<http://www.hirosaki.or.jp/>

問い合わせ先

弘前市

健康福祉部

健康づくり推進課

TEL：37-3750

い検査はできませんが、病状に応じて当番の輪番病院へ紹介になることもあります。

病院が交代で救急医療体制を整えています。どの病院が輪番かは上記の弘前消防本部**0172-32-3999**に電話で問い合わせせて下さい。

6回目の辰年(その1) (澤田美彦)

還暦のお祝いをしてもらったのが12年前だとは何と年月が経つのは早いものでしょう。今回も含め6回の辰年を区切りとしてこれまでのことを思い出しながら書いてみようと思います。



1) 12歳の辰年まで

私は昭和27年(1952年)、西目屋村大秋という小さな村の山奥で生まれた。その当時は保育所もなく小学校の入学式までの記憶がほとんどない。入学式の記憶が残っているのは、一緒に入学した女の子が泣いて記念写真をみんなと一緒に撮れなかったのを覚えているからです。今はその大秋には小学校から中学校の児童生徒は全部合わせても10人には満たないようですが、私たちの頃は1学年20人でした。学校から見える岩木山を何枚も写生で描いた記憶があります。弘前から見える岩木山には3つの山があるが、大秋からの岩木山は頂上が平らで一方が少し高くなっている。最近、その高くなっている部分が右側なのか左側なのか分からなくなった自分に気づいた。あれだけ何枚も描いた岩木山なのに。それだけ故郷から心が離れてしまったということですね。

小学校の頃は教室の中で勉強をした記憶がほとんどない。6年生の頃だったか、もう亡くなったが仲の良かった友だちと二人で社会科の資料を調べた記憶だけだ。教科とは関係なく、担任の先生は書道とそろばんを教えてくれた。そろばんは暗算の練習をしたので、その後の人生で大変役に立った。他の人よりも速く計算ができるのですから。ただ、数学の試験で間違いをすることが何回かあった。ある数学の先生が、「論理的にはちゃんとしているのに、なぜこの答えが1違うのか理解できない」、と聞いてきたことがあった。私には頭の中のそろばんの珠が一つ違ってイメージされていただけなんですけど。最終的な答えの数値が違ってても考え方がちゃんとしていれば点数がもらえた時代でしたからこれでも通用したんですね。

数字のこだわりは今でも続いている。街中で車を運転していると、対向車のナンバープレートに自然に目が行きます。そのナンバープレートには数字が2桁ずつ分けて書かれています。2桁の2組の数字を見ると自然に足し算をしているのです。「ちょうど99だ(空間がいっぱいになってしまう感じ)」、「合計すると1が3つ並ん

だゾロ目だな(幅の狭い横に長い図形)」、「これはきれいな数字の組み合わせだ」、「これは2つとも素数の組み合わせのナンバーだ」。この計算には想像の中でのそろばんを使っている。頭の中では計算していない。このそろばんの珠は自然に動いているのではなく、ハンドルを握る自分の右手親指と人差し指が動かしている。

筆で文字を書くことも小学校4年生から6年生までの担任の先生に教わった。でも、自分が書いた文字に先生が赤い筆で書き直した記憶はない。それぞれの子どもたちが手本を見て書くが、先生が手を入れることはなかった。中学校で教科の中で半紙に文字を書いた記憶がなく、小学校の時の記憶しかない。年を取ると、後輩から色紙を頼まれたり、書いた文字を手拭いにしてくれたりという機会が結構ある。昔取った杵柄というが、この年になって筆で文字を書いても小学校の頃に練習していたためか何とかなるものだ。

自分の子どもたちや孫たちのことを見ていて宿題があって大変だなあと思うことがある。私が小学校の頃は宿題はなかった。夏休みと冬休みには工作で何かを作って提出すること、図画を描いて提出すること、そして夏休み帳や冬休み帳を提出するという宿題はあった。夏休み帳はいつも出校日の前の日に書いて出していたことを思い出すが、これ以外で自宅で勉強した記憶がないのです。記憶がないのは当たり前で、自分の机はなかったし自宅では勉強したことがなかったのですから。

小学生の頃、父の125ccのオートバイに乗っていた。自分で運転してです。このオートバイは転ばすと起こすのが大変なくらいの大きなものだった。大秋には警察はいなかった。ある休日、オートバイを運転して小学校まで行った。そこには休みの日だったのに校長先生がいた。校長先生は運転を止めることもせず、叱ることもせず、「気つけで帰れよ」と言ってくれた。今の世の中ではとても考えられない対応だった。また、中学校の頃だから12歳は過ぎていたが、友だちを何人も乗せて車を運転し、「乗ってる頭数が多い」と駐在さんに止められた。もちろん車の免許はなかった。車を見た駐在さんは、「この車、沢田さんのでないが?」ということになり、そのまま家に帰してもらった。これも今では通用しませんね。(24歳の辰年に続く)